

カして巨目を殺し、大山祇に伴うて出雲に下り、手標乳の宅を訪うて素戔嗚尊に謁す(日本振袖始)

そろり 鞘師曾呂利。眞柴肥前大領久吉に仕へ滑稽に長す。嘗て奥小姓羽川算三郎が久吉秘蔵の鉢鍬の松を預りて之を枯したる時、曾呂利一首の和歌を詠じて久吉を祝す。久吉其歌をめで褒美を與へんと欲する物を嘗はしむ。曾呂利乃ち紙袋に只一杯の米を拜領ししと述べ、幅五間長さ十四間の紙帳を倉庫に打破せし座をして笑ひ興ぜしむ。久吉大佛殿を建立して其供養のし、曾呂利まづ至り大佛殿の堂上に腹這ひて煙草を喫し、鼻穴より森を指して飛下る(本朝三國志)

だいかくだいそうじやう 大覺大僧正。近衛經忠公の子にして月光と云ふ。幼にして兩鬚を失ひ繼母に疎まれ、亡父の善擧を昂はんとして嵯峨の大覺寺の僧となりしが、日像の徳に感じて法華經の行者となつて宗意を究む。或日鹽谷左京時平の兵に寺院を襲はれ、また勅命と伴り日像等と共に舟に乗せられ播磨沖に沈められんとせしが、法華經の功力によつて難を免かれて兒島三郎高則の家に養はる。かくて勅命によつて日像と共に新雨の修法をなして雨を降らす。爲に敬感によつて宗祖を日蓮大善禪、日像も善隣號、大覺は大僧正の號を賜はる(大覺大僧正御傳記)

たいそうくわうてい 太宗皇帝。唐第二世の皇帝なり。大纒冠錄足の頓藤照姫を迎へて后妃となさんとし、萬戸將軍雲宗を使者として結納の進物を携へて日本に遣はす(大纒冠)

だいそうじやう 鞍馬大僧正。鞍馬

山の天女あり。嘗て義經と師弟の契をなす。義經高麗の戰に破れて短裏に赴くや、大僧正は老翁と變身して釣籠を垂れ、義經に逢うて戒むる所あり。錦戸太郎國衡等が義經を敵を壓殺す(源義經將墓記)。釋尊の法眼なり。十二歳にして一丈五尺四寸の身長を有し勢力あり。淨飯王の養子たらんとし得ず。また耶麻陀羅女を稱戀慕す。釋尊出家の後、左衛軍右衛門等と共に恒河橋畔に耶麻陀羅女を要娶して奪はんとせしが烏院裏に破らる。釋に隨に服して佛門に歸依し天王如來となる(釋迦如來誕生會)

だうけん 不破入道犬。六角左京大夫顯賢の家老なり。顯賢の抱給師雲谷等と黨を結んで、狩野四郎二郎及び名古屋山三春平を放逐す。春平浪人となつて道大の子伴左衛門を京都馬原遊師の大門口に斬殺す。道大怒つて春平を竊殺人罪に訴へしが、却つて春平を罪に處せらる(傾城反理香)

だうじゆん 岐阜屋道順。大經師以春の妻おさんの父なり。おさん手代茂兵衛と思ひがけなき不義に陥つて断屠する途に道順を訪ふ。道順憐んで銀一貫目を與へて引かす。後に兩人捕吏に召捕られて刑場に連れてらるや、道順悲歎に暮れ身を以て罪を請ふ(大經師普應)

だうまん 蘆屋道滿。花山天皇の頃の陰陽師なり。弘徽殿女御の御懐胎を賀茂河原に祈禱して安倍晴明と論争す。藤原女御殺害に遭ひ、其怨靈毒蛇となつて宮中に現はれたる

を道滿被殺けんとして行方端く。また弘徽殿女御を按察左大將早岑の邸に誘ひ出さんとし、失敗し、清所の瓜茄子に魂を入れ加持して歸り、早岑と謀りて花山天皇を弑し奉らんとし遂に成らざる。男山八幡宮に隠れ給へる弘徽殿女御を奪はんとし平次兵衛盛重と共に懇々せしが、取殺して又五郎義長に殺さる(弘徽殿弑御廢家)

たうみんし 陶民子。江南の刀工なり。康熙五十七年二月福建國守六安王の命を奉じて寶劍を鍛へ、妻をして合鑪を打たせしめしが、打納めの合鑪の時に妻の入髪ゆるみて爲目より抜け落つ。陶民子これを見て密夫の爲に髪を切れるものと疑ひ打打せんとす。妻一室に駆込んで障子を閉つ。陶民子益怒り妻を自懸けて寶劍を投げ、妻直に其劍を拾うて基下に墜し、他の劍を己が腹に突立つ。劍奉行馬府官は腹に突立てたる劍を奪ひ、寶劍と信じて持ち歸る。是に於て妻は夫に謝し、妻はもと明の皇族繼體王に仕へ、連子の宋一貫は王の胤なるを語り、宋一貫を世に出さん爲己が髪を切つて宋一貫の髀に縫合せたることか明かす。陶民子は妻のこの言を聽いてきてはと驚き、己が短髭なりしを謝して決意す。是時馬府官の軍押寄せ、寶劍を取替へたるを詰つて陶民子を捕め去らんとす。陶民子自刃す(唐船斬全國性鑑)

たかひ 小山田太郎高家。足利尊氏に仕へ怒に觸れて浪人となり、貧困に生活す。其妻、新田義興の如の作物を掠めて縛せられしが、義興の同情によつて赦され、且繼を重まれて歸る。高家其鏡を著し尊氏の軍に屬して出陣し、西の宮にて義貞と戦つて粗伏せらる。義貞將に高家の首を刎へんとして、

其鏡を見舞んで之を助く。是に於て高家深く感激し、爲に其恩を奉ぜんとす。義貞戰敗れて窮せる時、義貞の身代りとなつて大森彦七盛長に斬らる(吉野郡女備)

たかこ 高子。清和天皇の中官なり。惟喬親王に奪去られんとせしを、在五中將業平に助けられて紀有常に預けらる。この事惟喬親王に知れ、親王乃ち有常を召喚して中官の首を刎ふべきを命ず。是に於て有常の密死して中官の身代りとなり、中官は紅梅に連れられ、清和天皇を尋ねて高安の里に下る(并簡業平河内道)

たかさだ 鹽谷判官高貞。高貞の室清水親吉に詣つ。高武藏守師直その美貌を眺めて戀慕に堪へず、鹽師寺公義をして口説かしむ。高貞之を見て大いに怒り、師直の膝に乘懸つて之を苦しむ。されど之が爲に師直より將軍家に議發されて切腹することとなる(兼好法師御見事)

たかさだ 望月六郎左衛門高貞。狛左京進盛光の家子なり。主君の姫香姫が繼母に虐待せられ、奈良猿澤池に投せられんとする場に密夫の近藤兵庫守廣忠に殺せんとする場に出遇ひ、直に香姫を助け廣忠等と戦ひ、山城伏見の南玉水の窟が下まで落ち延び、香姫に對ひ、懇に三比呂尼を尋ねて便らるべきを語り、痛手に堪へずして斃る(三世相)

たかしげ 長崎次郎高重。北條高時等部將なり。元弘三年五月二十二日新田義貞等

匹頭をかか言替へ脚色したるなり)

部將なり。元弘三年五月二十二日新田義貞等

鎌倉に攻寄せたる際、高時をして東勝寺に退かしめ、敵軍と奮戦して死す(相模入道千正犬)

**たかととき** 北條高時、入道崇鑑。北條九代の執權なり。犬を愛して政務を怠る。或日大倉が谷に鬪犬の會を催し、里見義満を引出して猛犬に嚙殺さしめんとして成らず。元弘三年五月二十二日義貞の軍と鎌倉に戦ひ敗れて死す(相模入道千正犬)

(序云、徳川綱吉の犬を愛護したる事を北條高時の犬を愛せしことに假托して、綱吉の失政を諷刺したるなり)

**たかなは** 笑高繩。東夷の首領外濶忍熊の重臣なり。源太夫の家に來り、日本武尊を隈まへるを疑ひて源太夫に湯起調を命ぜしが、源太夫の煩悩姫の美貌を一見して忽ち湯起調を免じ、其代りに誦姫を忍熊に奉らむべきを約して去り、翌朝誦姫を受取らんとし

て來つて日本武尊に追拂はる(日本武尊吾妻鑑)

**たかのり** 兒島三郎高則。備前の住人なり。鞍馬の奥に隱栖して忠節を立つる時を待つ。或日舟に禪して釣に出で、雨夜の前に遇うて之を家に連れ歸りて厚遇す。また日像の寺に參詣して、計らずも鹽谷左京時平の兵を破り、尋で高橋半平に欺かれて、日像・月光等と共に舟に乗せられ、播磨沖に沈められんとせしを法華經の功力によつて難を免かれ、日像等を我家に伴うて保護し、日像と佛法の問答をなし、妙法の不思議に感じて深く法華の信者となし(大覺大僧正傳記)

**たかはる** 小山田前司高春。我子の高

人名部

家が新田義貞の恩に感激し、其身代りとなつて大森彦七に斬らる。母氏其首を見て疑ふ。高春一見して我子の首なるを知りしが、一旦獄門にかけて義貞か否かを正すべきをいひて其首を見て泣く。高春の妻も勾當内侍も來つて其首を鼻す。高家の妻も勾當内侍も來つて其首を見て泣く。高家の妻も勾當内侍も來つて其首を見て泣く。高家の妻も勾當内侍も來つて其首を見て泣く。

**たかひら** 七草四郎高衡。奥州仙北の城郭に據り、葛西郡司清重と戦つて右の膝口を射られしが、幻術を用ひ雲霧に紛れて遁れ、京都に落ちて物商行商人となり、邪法を以て衆を惑はす。また島原の傾城更科を愛して之を誘出さんとして富原左衛門宗重の兵に圍まる。四郎幻術を行ひ、更科を連れ往に化して飛去り、更科の父手塚晴繼を訪うて邪法を勸むる際、葛西清治に讒撃せられて姿を消す。後、筑紫の七草城に據り、近郷の士民を集めて死守し、寄手の郡將富原宗重を殺ししが、清治等の軍に攻められて城遂に陥る(傾城島原魁合戦)

(序云、この作は天草の亂(寛永十四年)を仕組みたるものにして、七草四郎高衡は其實天草四郎時貞を脚色したるなり)

**たかふさ** 藤原民部少輔孝房。播州の惣郡代賀古前令更藤原教孝の長男なり。大内修造の命を蒙つて京に滞在、九條の遊女宮城野の色香に溺れて御普請料を浪費し、世には熊野浦に難船して溺死せりと伴つて海人の笛屋に落着く。後、宮城野が神崎の遊女に奪はるるを尋ね行きて、計らずも我子の源光の

行方を尋ねることとなり、飛田の墓地を彷徨して弟の教信等に邂逅す。是時賀古郡主より大内獻上の權柱を引來ることなどありて、孝房遂に本領安堵となり、賀古の庄に伽藍を建立す(賀古教信七嘉純)

**たかふぢ** 清原中納言右大將高藤。天曆帝の御宇鷹尊を極む。諸國を遊覽して佐夜中山に來り、源頼光の宿せざるを迫拂ひて夢屋に泊す。折しも平政盛來つて物部平太の同宿を請ひ其保護を依頼す。高藤之を諾す。此夜平太・喜之介に斬らる。是に於て喜之介を捕へんとし頼光の宿舎を奪つて渡邊綱に破らる。都に歸つて頼光を護奏す。また部下の者を岩倉大納言兼冬卿の邸に遣し、澤瀉姫を奪はんとし果さず。後罪を獲て鬼界島に配流せらる(堀山姥)

**たけ** 一つ屋嘉平次の姉の内の飯炊女なり。嘉平次の姉の供して行く途に嘉平次の自分に對する痴話を明かす(生玉心中)

**たけ** 阿波の土平岡左近の下婢なり。奴の礎右衛門と契り、夫の放婦を忍んで親切を盡すを左近の室に聞かれ、其心をめだられて發白匹を悪まる(夕霧阿波鳴渡)

**たけ** 松下嘉平次の下婢なり。眞柴肥前大領久吉が以前嘉平次に奉公せし時之と感勲を通ず。久吉天下學塾の後、お竹は嘉平次の伴して久吉に逢ひ、舊馴染を語つて敵れかかる。また嘉平次の命を奪つて阿輪町へ飲食物を買ひに行く(本朝三國志)

**たけ** 小餘段新左衛門尉景春の妻なり。夫が藤室女御を殺害したる嫌疑を受けて刑せられ、後、羽倉伊賀久國に奉公して阿竹といひ、感勲を通じて遂にその妻となる。或日我

子の小文五訪ひ來て互に身の上を歎く。久國聽いて感に堪へず、藤室女御を殺せるは我なりと自白す。是に於て母子連立つて源頼光の廷に出で、冤罪によつて無罪を刑したるを詰る。頼光乃ち景春を出して放免するや、これは夢かとはかり喜ひ、且つそれとも知らず敵の妻となりしを歌いて自又せんとせしを貞光等に制止せらる(弘毅殿編羽屋家)

**たけくに** 縣權正武國。吉田少將藤原行房の重臣なり。山王權現二十一社の修造に精勵せしが、常陸大掾百連に其用材を離せられるに怒る。行房が勘解由兵衛景尚に賦せらるるや、武國乃ち行房の妾班女を伴ひて大理廳に訴へ、吉田家相續につきて奏請す。後、行房の子梅若の行方を尋ねて東路に下り、隅田川畔にて故舊淡路七郎俊兼に遇ひ、主家の事情を語つて梅若君の行方を問ふ。俊兼大に驚き、さては梅若君と知らずして撲殺したるを自白して自刃す。武國主君の敵と呼ばはつて俊兼の死骸を披討にし、百連を攻めて之を破る(雙生隅田川)

**たけはる** 藤内三郎武治。大鼓鼓の藝人なり。兄盛治の意見に従はず、叛臣亦沼幸滿に屬して新波義將を古川龍頭清氏の邸に攻めて捕縛せらる。後、前非を悔い盛治と和して亦沼父子を攻む(喜五郎夜羽子)

**たけひこ** 吉備武彦。吉備國産の兄なり。大碓王子暴戻なりしかば景行天皇の逆鱗に觸れ、斬罪に處せられんとせしを武彦申請けて我邸に伴ひ歸り、其惡心を矯正せんとし、深く心を研ぎしが、王子遂に改心し給はず。是に於て武彦は失聲の餘り、一子田鶴若を刺し、なほ妻と共に死を以て謀めんとするに及

六七七

んで、王子始めて武彦の心に感激し、前非を悔いて心を改め給ふ(日本武尊昔妻送)

**たじべゑ** 太次兵衛。山城國西の岡原原の土民なり。明賢等と共に又次郎を討ひ、又

次郎の飼牛の玉を見たりと稱して其祝の宴を勤め、精進料理を出されたるを怒りしが、又次郎より其理由を聴いて心解く(嵯峨天皇廿録雨)

**たしらう** 柗屋大四郎。江州錦山の遊郎柗屋長の子なり。屢父の邪僧狂養を誅む(傾城酒呑童子)

**ただつね** 新田四郎忠常。曾我の下人鬼主の妹より虎御前を助け下さるやう頼まれて、海野小太郎に捕へられたる虎御前の難を救ひ、また富士野の狩に人のもてあましたる大猪を刺殺す。頼朝その武勇を賞して名馬の松島月毛を與へんとせしを工藤祐經に阻まる

忠常怒つて祐經を殺さんと思へる折しも、曾我祐成が、祐經は祐成の爲には亡父の仇なれば何卒杖に討取らせ下されし。杖本機を逃げたる後は錢首を討つて功名となし給へとの懇請を容れて別る。かくて後祐成は祐經を討つて忠常に斬らる。曾我三子の弟藤助の刑せられんとする時、忠常己が高名に代へて頼朝に請うて之を助け(百日曾我)

**ただのぶ** 佐藤四郎忠信。源九郎義經の家士なり。義經が九條北町柏屋の拘被若紫の色香に迷へるを諫止せんとして勸留を受く。是に於て三井寺邊に忍び隠れしが、或日忍妻の芥紫と途に遇ひ、また貞順尼と姿を變へたる若紫に遇ふ。時に梶原平次身早が義經を討取らんとして追ひ行くを見て之を斬り、忍妻と訣別して義經の跡を慕ひ行き吉野山

に逢ふ。是時山法師に懇懇せらる。忠信乃ち足止りて義經等を連れしめ、奮戦して横川覺範川金法眼等を殺す(吉野忠信)

出羽國佐藤庄司の子にして義經の弟なり。源九郎義經に仕へ、平家追討の爲に屋島に向ふ。兄義經が義經の身代となつて能登守教經の矢を受留め深傷を負ふや、忠信は義經の命を奉じ、義經を尋ねて連れ歸る(津戸三郎)

**ただひら** 泉三郎忠衡。藤原秀衡の三男なり。亡父の遺命を守つて義經を奉ずること厚し。偶鎌倉の飛脚に遇ひ、これ携へたる文を奪つて、兄鶴守太郎國衡等鎌倉の内應して義經を沮へるを知り、これより兄弟不和となる。忠衛心に義經を高館に置いては危険と思ひ、早く遁去らしめん爲に、辨慶が金の無心を言ひしを懇と被拒して義經を罵倒し、妻忍の前堪へかねて誅言するを、心ならずも妻つて妻子を追拂ふ。忠衛の心中萬斛の涙あり。かくて後、亡父の菩提所無量光院新御堂て行き兄弟等の罪を窺へるを覺られて脚懸せらる。忠衛力戦し第五郎を刺して自刃す。行年二十八(源義經將基經)

**ただひら** 忠平。朱雀院御宇の攝政なり。勳命を奉じて後藤七右衛門と藤原忠文との兩人に智恵競べを命じ、七人の美女を出し、其中より錦木の前を言當てたる秀郷に、平將門討平の將軍宣下と錦木とを授く(傾城戀物抽)

**ただぶみ** 常陸大塚藤原忠文。平將門討平の將軍宣下を得んとして、後藤七右衛門との智恵競べに負く。これより將門と通じ、將門に美女を薦めて歡心を得んとし、京九條の遊女屋大文字長を語らひ、相共に將門の居城に赴く途中、將門の亡父長將の幽霊に遇

うて非を誹され、まづ秀郷を討取らんとして秀郷に殺さる(傾城戀物抽)

**ただまさ** 大宅忠正。源頼光の家士なり。佐佐目少弐來つて頼光に面談を求めたる際、取次に出で少弐の鄙散なる振舞に怒り、武力を以て遠見判官唯光(關八州警廳)の矢を討つて追返されたるを憐れし、名畫十幅を陳列して遠藤假寛の徒然を感む(大掛十幅一對)

**ただみつ** 千手太郎忠光。元は名ある武士なりしが、浪人となりて木曾の里あたりに住し狩獵に日を送る。或日深草山にて兎を射んとし誤つて源九の袖を射る。忠光乃ち源九に深く謝して其臣となる。これより源九の敵右大辨早廣と轉戦して功あり。辻談義に身を借して早廣を殺す(錦丸)

**ただむね** 長田庄司忠宗。尾張國内海の豪族なり。源頼朝來り便れるに乗じ、義朝等を殺して平家の恩賞に預らんとし、仲景宗と謀つて義朝の家士鎌田正清を殺し、義朝を瀆の茶屋の裏湯に瀕いて殺さんとして源頼光の爲に縛せられて殺さる(鎌田兵衛所五)

**ただよし** 河村金吾忠義。北面の武士なり。以呂波の前が夫の身を案じて冤罪を蒙るや、忠義これを預りて深く同情し、處死刑執行の日以呂波の前と稱して己が妻を刑場に引き、之が首を刎ぬ振して俄に太刀取判官代達貞の首を刎ぬ、妻及び以呂波の前を連れ逃走し、奈良般若寺の傍に忍び以呂波の前を連れ居る前の夫藤原光顯を尋ねて神谷の宿に至

り、空海と遇うて都に上る。西寺の僧守敏に陥れられて刑せられんとせしを空海の法力によつて救はる(以呂波物語)

**たちはな** 勳命。平城帝の御宇宮中第一の美女なり。立命によつて百合若大臣と婚す。百合若蒙古征伐に赴きて行方不明となりしかば、立花愆歎して死す。是に於て立花の携へし練丸と云ふ鷹の矢の精立花の姿に化して遠島に來り、百合若と同様して四年の春秋を送りし中一子遠城丸を生む。或日母子共に八幡に詣て、忽ち鷹の本性を露はし、母子を攫ふに引裂きよつて遂に百合若に己が素性を打明く。是時別府蒙源蒙古の寇に扮して來襲す。練丸の精乃ち翼を以て遠城丸を保護し、都を指して飛んで百合若の船を導く(百合若大臣野守鶴)

**たちはなひめ** 橘姫。尾張の新興源太夫の娘なり。日本武尊來つて便られたる際御伽女に召さる。後、神龜乙女に扮して尊を尋ね出で、待女を伴つて清見關を通過せんとし、関守細目木口に見覺められて通過を拒まる。姫乃ち飛掛つて関守を刺殺し、尋で日本武尊と逢ふ(日本武尊昔妻送)

**たつ** 阿辰。大阪萬年町船屋の女にして徳兵衛の妻なり。子を伴つて館屋町なる姉を訪うて歸れば、夫は留守にして懸説明けたる儘に夫婦の印判取散してあるに驚ける折しも、舅來つて口入業右衛門より阿辰夫婦が借金したる理由を詰問す。お辰良人の悪性を押包み體よく誤魔化して歸らしめ、夫の歸るを待受け其改悛を促して泣く。この夜夫出でて歸らねば、或は馴染遊女の房と情死もやせんと案じて其行方を尋ね出づ(心中重井筒)

ら、空海と遇うて都に上る。西寺の僧守敏に陥れられて刑せられんとせしを空海の法力によつて救はる(以呂波物語)

**たね** 阿種。因幡の藩士小倉彦九郎の妻なり。夫が江戸詰留守中養子文六の敵師匠宮地源右衛門を襲し、強欲して夜に及ぶ。彦九郎の同役に濃邊床右衛門と云ふ者あり。かねてお種に懇懇す。この夜籍に來つてお種を誘む。お種欺き明夜を約して歸らしむ。源右衛門隣室にありて之を聞き、蓋に託して風刺す。お種愧ぢて源右衛門に他言せざらんことを謂ひ、醉狂の過より不義に陥る。床右衛門再び來つて兩人姦通の證を捉ふ。彦九郎歸國し妻の不義を傳聞して大に怒る。お種悔悟して持佛堂に自刃す。(堀川波鼓)

**たねなほ** 熊谷小太郎種直。熊谷次郎直實の子なり。年十三、姉の清姫と共に父の行方を尋ねて迷ひ出で、途中人買ひに勾引され、赤坂の宿にて平山季重に救はる。かくて後斬黒谷に父を訪うて不在なりしかば信濃路に赴き、江州粟津の松原にて病死す。(大原問答青葉笛)

**たねはる** 結城右衛門太夫種春。三河國岡崎なる松葉川の橋守なり。或日今川仲秋及び千鳥の前來つて橋を渡り、其橋代二錢を出したるに、これを詭取る際過つて其一錢を川中に落す。是に於て人夫を請ひて水底を探し、其禮に三百文を與ふ。これより仲秋に頼まれて追手の兵十餘人を殺し、義兵を集めて四萬餘騎を得たり。時に嘉吉元年踏月下旬なり。荒川近平、大道寺勝房、青砥藤次も來會し、大舉して眞廣の據れる駿府城を攻めて之を抜く。(今川了後)

**たねふさ** 葵大臣種房。綾羅姫の父なり。安藤天皇御病身にて御讓位の御心あるや、種房乃ち帝位を泊瀨皇子に傳へ給ふべき

を奏上す。後、雄略天皇玉體を罪し給ひて入牢しませしすを見て、種彦深く悲歌に沈む(浦島年代記)

**たへゑ** 太兵衛。大阪親柳掛町八百屋伊右衛門の妻の姪なり(心中宵庚申)

**たへゑ** 太兵衛。伊丹の商人なり。紀の國屋の妓小春を慕ひ、友と連立つて揚屋河庄に小春のゐるを見て立寄り、己に賺かしめんとて、再び長つて治兵衛格子を騙されて出で、再び戻つて治兵衛格子を縛せられたるを打撃し誹謗して、武士に聞き始められて投付け路付ける。後に太兵衛、小春を請出す契約成つて、小春治兵衛と儲死す(心中天狗島)

**たま** 大經帥以春の下女なり。以春たまに懇懇して屢挑めども應ぜず。以春の妻おきん、手代茂兵衛と不義を遂ぐ。たま其媒介をなせるものとされ、助右衛門に縛せられて梅籠に預けられ、梅籠の手にかりて死す(大經帥普盛)

**たまつばき** 玉椿。本阿彌右衛門太郎清肺の娘なり。藩内二郎盛治に羽子を拾はれて話合ひ、盛治に簾刀を得させんとし、之を屋内に引入る。(雪女五枚物ざん)

**たまつる** 玉鶴。物部守屋の女小性を勤め、膳殿實と戀通す。觀實守屋に殺されしかば、玉鶴は其首を携へて聖徳太子の妃芹摘姫を訪ひ、守屋の部將東直駒に攻寄せられしを、跡見赤檝に助けられて芹摘姫と共に奈良山に落ち行き、鉢開坊主に遇ひて其家に泊す。聖徳太子の馬丁調使丸訪ひ來て、太子梵天宮へ奉りせられたるを語る。是時守屋の部將弓削勝海來襲す。鉢開坊主がて濟摩

と化現し覆襲して敵を破り、葦舟によつて芹摘姫及び玉鶴を連れしむ(聖徳太子繪傳記)

**たまゆらぎみ** 玲瓏君。京都錦小路中納言彦通御の娘にして美女なり。余吾將軍平惟茂と親る。或日門外にて金剛兵衛利鞠と橘諸任の郎等との喧嘩あり、惟茂が世繼御前と婚するを知つて憤り、我を婿にせよものと利鞠を供に連れて與入の際、諸任の郎等に奪去られしを連れて其家來養はる。世繼御前と共に惟茂より手紙を得て嫉妬せしが遂に心解け、共に俱に惟茂を尋ね、近江路を経て信州下り、戸隠山にて惟茂と逢ふ(杵狩聖本地)

**たまよのひめ** 玉世姫。豐後國東野長者の娘なり。百島大夫を伴うて大和國櫻隈岡に住み、花人親王を招待して股敷を通す。是時山彦王子に誘はれ、親王と共に西國に遁れんとして風波に流され、佐渡島に漂着す。後、豐後國に歸り、繼母に虐められて腹胎棄を吞み、却つて男子を生む。之を廣戸の皇子と申す(月明天皇職人鑑)

**たむらぎ** 坂上田村麿。平城天皇の御宇大納言右大臣大將たり。勢州鈴鹿の惡鬼退治の勅命を受け、戰勝を清水寺に祈り、鈴鹿權現に祈願を籠め、遂に鈴鹿山の大小九及び惡鬼を退治して京師に凱旋す。田村將軍初觀音(「つるさきは」條を見よ(相模入道千正太)

**ためか** 鎮西八郎源爲朝。平治の亂に父爲義に屬して平清盛源義朝と戦つて武功を立つ。後、播磨に扮して尾張に下り、濱の茶屋の養母に入浴せんとして、長田前庄景宗等が源義朝を騙討にせんとする體謀を察知

し、敵を追拂うて義朝の危難を救ふ(鎌田兵衛名所益)

**ためな** 江文、宰相爲成。詠歌姫の義父なり。類平詠歌姫の夫妻脱兎良門の一味となるや、爲成連坐の罪によつて、官位を削られ追放せられしが、後救さる(關八州駈馬)

**たらう** 浦島太郎久壽。龍宮の善女龍王と契りて設けたる子を原行平に與へ、龍王より形見として貰ひたる玉手箱を携へて丹後立てられしが、龜彦の庄司に救はれて其奴となる。庄司が松風を殺さんとするを察知して之を刺す。孫九の下人顔見九郎玉手箱の蓋を開けば、紫雲堀引き浦島太郎忽ち白髮の老人となる。是時孫九に亂入されて之を殺す。武功をめでて網の明神の號を賜はる(松風村雨東帶鑑)

丹後國與瀨郡水江の浦里の人なり。圓大臣の家士乾平馬が瀧りし大龜を奪ひて海に放ち、また平馬が泊瀨皇子を狙へるを見て之と戦へる際、太郎の妻海に投込まれて死す。大龜即ち太郎の妻に化け、太郎夫妻皇子に陪從して都に上る。然るに妻秘宴の酒に酔ひて眠れる際、平馬の來るに目覺し、平馬を神殿に閉籠めて太郎をして討取らしめ、妻はもと龍宮に歸る。かくて太郎は雄略天皇に従つて葛城山に頂輪王を退治し、大島洲にて圓大臣を殺し、龍宮に赴きて乙姫に逢うて逗留すること三百五十五年。乙姫より形見の玉手箱を貰ひて嚴島に歸り、玉手箱を開きて七世の孫久富の雛儀を救ひ、旱天に雨を降す。而し

て自らは玉手箱を開きし爲怒ち白髮の老人となる(浦島年代記)

たらう 長田庄司太郎。常盤及び牛若を捕へて護送する途中、朱雀野にて金玉丸盛長に殺さる(源氏烏帽子折)

たらう 宇治太郎。本見縣主時景の嫡子なり。父と心を合し濃濁姫の天鼓を奪はんとして之を擄め、且姫の愛人吳服中將雪枝を隠ひしも、陸奥局及び金目丸に欺かれて追拂はる。また姫の控那守なる坊の太寺に押寄せて天鼓を守る彌介狐を殺し、鞆親王に誘せる際彌左衛門狐に撲伏せられて首を抜かる(天鼓)

たらさぶらう 太郎三郎。三田村の農夫にして、大阪本町新物店蕎屋の下女おききの父なり。「じろべま」を見よ(今宮心中)

たらさゑもん 太郎左衛門。京都四條石懸町婿家并筒屋の主人なり(長町女腹切)

たらさゑもん 太郎左衛門。大阪新町并筒屋の主人なり。末木屋の太夫吾妻を送つて八幡に赴く途中、江戸屋勝二郎追放せらるるに遇ふ。是に於て吾妻の身請金二百兩の不足を引請けて吾妻を勝二郎に渡す(淫離出世瀧徳)

だんざぶらう 團三郎。曾我三子の下人なり。三河國鳳來寺に參詣し、禪師坊が虎御前に戀慕する醜態を見て悲憤に堪へず、之を鎧付けしが、其深意を知るに至つて無禮の罪を謝す。富士野の狩場にて京小二郎が河津三郎一代記の辻講釋せざるを難じ、曾我三子に一味して敵討すべきを勸む。後、大旗にて工藤祐經の下人近江八幡を捕へて曾我三子に渡す(曾我五人兄弟)

源氏の家士鎌田兵衛正清の郎黨加藤六有村の子にして、朝顔及び鬼玉の弟なり。「おにわう」を見よ(本領曾我)

曾我三子の下人なり。百介と稱して大藏遊廊の夜番を勤めしが、遊女少將より工藤祐經の消息を聞いて直に之を曾我三子に報告す。後、鬼王と共に富士裾野より曾我三子の形見の品品を持ちて曾我の里に歸る途中、適に富士裾野の狩場に松明駆抜手質人を運ぶ混雑に事變起れる有様を想見す(扇八景)

團三郎は箱王に、箱王は團三郎に扮して箱根耀現に詣る。曾我三子死せし後、兄の鬼王と共に越後の國上寺に禪師坊を訪ふ。折しも京小二郎が禪師坊を訪ひて時宗なりと偽り、禪師坊を欺きて擄め去らんとするに遇ふ。是に於て團三郎は禪師坊と心を合せ、謀計を以て朝に召されて恩賞に與かる(加増曾我)

大鹿に假裝して富士裾野の狩場に入る所を、工藤祐經の家來八幡四郎に捕へられて祐經の前に引出さる。是時曾我三子の來るを見て、團三郎頓智を以て曾我の老母大病の由を語り、三子をして母を見舞に歸らしむ(曾我會稽山)

丹内兵衛。伴大納言宗岡の家臣なり。惟喬親王の命を奉じて清和天皇の中官高子の首を受取る使者となり、首桶を携へて紀有常の留守宅に赴き、中官の首を獲んことを迫る(并角業平河内通)

本多次郎近經。畠山重忠の家士なり。梶原景季の郎等番堀忠太久が辭を引立てて獄に投ぜんとするや、近經乃ち國入を投倒して辭を救ふ。後、相模川に曾我三子を伴うて川道通せる際、國入に遇うて口論す。源頼朝が御持馬捕せし際、近經密に曾我三子及び小柴掃部勝重を導きて國入を討取らしむ(大藏虎稚頼)

曾我兄弟が亡父の仇を報ぜんとして富士裾野の狩場に入り込みし時、近經・曾我兄弟に同情して工藤祐經の所在を教ふ(曾我會稽山)

荒川藏人近平。今川伊豫守源貞世入道了後の重臣なり。了後の嫡子仲秋に陪從して京に在りしが、了後の病革るや、仲秋と共に歸國す。駿河守貞廣に呼ばれて行く途に同役大連寺勝房に遇うて貞廣の叛心正るを聞き、直に勝房と共に富士権現の別當正圓坊の許に赴き、之を擄めて歸る途に青砥五郎藤次が貞廣に欺かれて自分等を召捕へんとして來るとに遇ひ、即ち實を告ぐ。是時貞廣叛旗を擧ぐるとの報あり。是に於て三人相別れ、近平は都に上りて世評に意を注ぐ。或夜大藏小藏の境なる松原の辻堂に眠れる際、夜盜の雨具を盜むに氣付き、直に起上りて斬結びしが、折しも通りかかれる大道寺勝房に誰何せられて、夜盜と思ひしは青砥五郎藤次なりしかば、三人邂逅したるを喜び、相共に主君を尋ねて三河に行き、結城右衛門大夫種春の軍に合し、貞廣の據れる駿府城を攻めて之を抜く(今川了俊)

融大臣の媒介によりて子の日と逢ふ際、子の日誤つて融の室青柳を刺殺す。是に於て千里、子の日共に死せんとしたるを冷泉坊の法師に諭されて思ひ止まる。千里勸使となり、融を尋ね風州に下る途に、籠の長者・融夫妻に邂逅し共に都に上る(融大臣)

知貞。遊女屋に鴛老を勤めしが、事に感じて比丘尼となり、北條頼朝三郎の庵室を訪ふ。是時近藤兵衛守廣忠に襲撃せられて斬三と共に遁る。後、斬三と共に遊女の文を集めて吉野の興に玉璋歌を作り、勸進に出でて奈良に至り、廣忠に縛せられしも相左京進盛光に救はる(三世相)

持統天皇。養子春彦尊の暴戾を忍んで、位を二の官の夏仁親王に譲り王妃を定め給はんとして、諸國より孝女を召し、國栖の閉寮の娘長秋が美態にして孝心深きを愛でて王妃に定め給ふ。かくて天皇は善養寺の逆謀によつて幽閉せられ給ひしが、淺衣に救はれて飛鳥の里に蒙塵し給ふ。尋で布引勝虎兄弟等の忠節によつて尊の軍を破り、春過ぎて夏來る泰平の世となる(持統天皇歌筆法)

霧島の漁夫の娘なり。鬼界島に丹波少將成經と契り、俊寛の養女となる。平家の家士丹左衛門尉藤原康・妹尾太郎兼康の兩人鬼界島流入召還の使者となつて來り、成經・康領千鳥を乗船して備後國數名浦に至り、俊寛の下人王有丸が俊寛を尋ねて下るに遇ひ、康願乃ち千鳥を俊寛の形見として有丸に渡す。是時平清盛の船もこの浦に泊し、鳥羽法皇を海に沈め奉る。千鳥直に海に躍入り水を溜つて法皇を救ひ奉りしが、自らは清盛に熊手を打立てられて無姫の死を遂げ、其怨靈顯患の業火となつて千鳥の死骸より現はれ、清盛の頭上に舞ひくぐるめく。是より清盛火の病に罹つて死す(平家女護身)

千鳥の前。野宮中納言公通の娘なり。今川左衛門尉仲秋と感勲を通

す。或日今川了俊の墓に詣でて櫛の枝に文を  
結付くる際、仲秋の來るに遇ひ、青砥五郎勝  
次の媒始にて婚儀披露を相談せる折しも貞廣  
の腹撃に遭ひ、仲秋と共に身を以て、通れ三河  
國岡崎なる松葉川まで落ち延び、橋守の結城  
右衛門太夫種春に助けらる(右衛門俊)

**ちぶあんもん** 梶田治部右衛門 山崎  
與次兵衛の妻お菊の父なり。與次兵衛冤罪を  
蒙つて鎮居するや、其父浮閑を訪ひ、密奏に  
託して謝罪金を出し與次兵衛を助くべきを意  
見し、また與次兵衛の爲に吾妻を請出さんと  
して井筒屋に赴き、難與手に邂逅し協力して  
遊屋彦介を縛す(鷹門松)

**ちへゑ** 紙屋治兵衛 大阪大湊官前町の  
紙商なり。曾根崎新地紀の團屋の遊女小春と  
馴染む。伊丹の太兵衛も小春を慕ひて戀の敵  
治兵衛を罵詈する。而も小春は深く治兵衛を慕  
ひて太兵衛を憎む。治兵衛の妻おさんは夫の  
放蕩を苦にし、密に書をお春に送つて治兵衛  
との絶縁を懇請す。小春泣いて之に従ふ。治  
兵衛の兄孫右衛門も治兵衛の身の上を憂慮  
し、武士に假裝し河内屋に小春を擲げて其心  
を探る。小春は治兵衛を思ひ切ること能はざ  
るに太兵衛に請出されんとするを悲んで死を  
決す。と雖も、誓ておさんの手紙に應へし詞の  
義理を重んじ、心ならずも孫右衛門に對して  
我身の治兵衛と疎遠になるやう頼む。治兵衛  
外にあつて之を立聞きし、小春の無情を憤激  
し七首を引いて小春に摘つて中らす。孫右衛  
門直に起つて治兵衛の手を捉へて格子に縛  
し、暫くして其縛を解いて改心を諷す。治兵  
衛乃ち小春の薄情を痛罵殴打し、誓て小春よ  
り廣ひたる誓紙を投返し、兄をして己が小春

に與へたる誓紙を取返さしむ。かくて後おさ  
ん、小春の太兵衛に請出さるるを知るや、更  
に小春の身を氣遣ひ、誓て手紙を送つて治兵  
衛との絶縁をお春に懇請し九郎實を夫に打明  
け、小春の死を救はんとして所持金銀類全部  
を提出し、夫をして小春を請出さしめんと  
す。是時おさんの父五左衛門來つて治兵衛の  
放蕩を詰り、おさんの離縁を迫つて拉し去る。  
是に於て治兵衛死を決し、小春に逢うて大相  
屋に最後の宴を張り、兩人相携へ夜夜に紛れ  
て納島に走り情死す。治兵衛年二十八。小春  
年十九(心中天細墨)  
(實説は享保五年十月十四日情死す)

**ちやうざく** 印傳屋長作 大阪西國橋  
に住す。茶碗屋嘉平次より價格十五六兩許の  
陶器を取寄せ、之を他に賣却して其代金を横  
領し、嘉平次より催促されて既に支拂へりと  
稱して罵詈を極む。後また無賴漢を伴ひて嘉  
平次の宅に侵入し、財物を奪ひて逃走す(生  
玉心中)

**ちやうべゑ** 笠屋長兵衛 大阪北久太  
郎町の古道具商なり。妻いまの言を信じて兼  
子舞與兵衛を疎み離縁せんとす。これが爲に  
娘お龜死するに至る(卯月紅葉)

**ちやうざく** 印傳屋長作 大阪西國橋  
に住す。茶碗屋嘉平次より價格十五六兩許の  
陶器を取寄せ、之を他に賣却して其代金を横  
領し、嘉平次より催促されて既に支拂へりと  
稱して罵詈を極む。後また無賴漢を伴ひて嘉  
平次の宅に侵入し、財物を奪ひて逃走す(生  
玉心中)

**ちやうざく** 印傳屋長作 大阪西國橋  
に住す。茶碗屋嘉平次より價格十五六兩許の  
陶器を取寄せ、之を他に賣却して其代金を横  
領し、嘉平次より催促されて既に支拂へりと  
稱して罵詈を極む。後また無賴漢を伴ひて嘉  
平次の宅に侵入し、財物を奪ひて逃走す(生  
玉心中)

**ちやうざく** 印傳屋長作 大阪西國橋  
に住す。茶碗屋嘉平次より價格十五六兩許の  
陶器を取寄せ、之を他に賣却して其代金を横  
領し、嘉平次より催促されて既に支拂へりと  
稱して罵詈を極む。後また無賴漢を伴ひて嘉  
平次の宅に侵入し、財物を奪ひて逃走す(生  
玉心中)

**ちゆうざぶらう** 忠三郎 大和國新口  
村の農夫にして龜屋忠兵衛の故朋輩なり。忠  
兵衛大阪薩屋敷の侍の委託金を横領して遊女  
梅川を落籍し、相伴ひて忠三郎留守中其家  
に立寄る。忠三郎歸宅し、捕吏の追求急なる  
を告げ、兩人をして直に御所街道へ遁走せし  
む(冥途飛脚)

**ちゆうだべゑ** 岩木忠太兵衛 出雲  
藩士にして進物番を勤め、淺香市之進の妻に  
さみの父なり。笹野番三及び川側伴之丞に遇  
うて、藩主の若者の祝言の悦によつて茶儀行  
はるべきを語り、茶遣指兩役淺香市之進不在  
なる故、眞の壺子の茶儀を行ふべき者を兩人  
に命ず。おさき、權三と不義に陥るや、市之進  
怒つておさきの嫁入道具及び二人の壺を送付  
く。忠太兵衛深くおさきの不行為を悲しみ、

**ちゆうだべゑ** 岩木忠太兵衛 出雲  
藩士にして進物番を勤め、淺香市之進の妻に  
さみの父なり。笹野番三及び川側伴之丞に遇  
うて、藩主の若者の祝言の悦によつて茶儀行  
はるべきを語り、茶遣指兩役淺香市之進不在  
なる故、眞の壺子の茶儀を行ふべき者を兩人  
に命ず。おさき、權三と不義に陥るや、市之進  
怒つておさきの嫁入道具及び二人の壺を送付  
く。忠太兵衛深くおさきの不行為を悲しみ、

**ちゆうだべゑ** 岩木忠太兵衛 出雲  
藩士にして進物番を勤め、淺香市之進の妻に  
さみの父なり。笹野番三及び川側伴之丞に遇  
うて、藩主の若者の祝言の悦によつて茶儀行  
はるべきを語り、茶遣指兩役淺香市之進不在  
なる故、眞の壺子の茶儀を行ふべき者を兩人  
に命ず。おさき、權三と不義に陥るや、市之進  
怒つておさきの嫁入道具及び二人の壺を送付  
く。忠太兵衛深くおさきの不行為を悲しみ、

**ちゆうだべゑ** 岩木忠太兵衛 出雲  
藩士にして進物番を勤め、淺香市之進の妻に  
さみの父なり。笹野番三及び川側伴之丞に遇  
うて、藩主の若者の祝言の悦によつて茶儀行  
はるべきを語り、茶遣指兩役淺香市之進不在  
なる故、眞の壺子の茶儀を行ふべき者を兩人  
に命ず。おさき、權三と不義に陥るや、市之進  
怒つておさきの嫁入道具及び二人の壺を送付  
く。忠太兵衛深くおさきの不行為を悲しみ、

其諸道具を門前にて焼拂ふ(權三重帷子)

**ちゆうべゑ** 龜屋忠兵衛 大和國新口  
村の農夫勝木孫右衛門の子。大阪淡路町飛脚  
商龜屋の養子なり。大阪新町遊遊屋の遊女  
梅川と馴染み、之を落籍せんとし丹波屋八  
右衛門の爲替金五十兩を私贈す。八右衛門爲  
替金の交付を迫るに及び、忠兵衛泣いて具に  
情實を生ず其符録を懇請す。八右衛門之を諸  
す。忠兵衛の義母如問はかかることに知ら  
ず、忠兵衛をして八右衛門に替替金を渡さし  
めんとす。是に於て忠兵衛髪水入を包み小判  
金の如く見せて之を渡す。八右衛門熱ら忠兵  
衛の行末を察じ、遊女をして忠兵衛水入を示  
し、誇りかに忠兵衛の顛状を揚書罵詈す。是  
時忠兵衛薩屋敷の侍の委託金三百兩を懐にし  
て越後屋に來り、外に立聞きして大に怒り、  
八右衛門と口論して五十兩を投付け、梅川を  
も落籍して郷里新口村に伴ひ、舊友忠三郎の  
宅に立寄る。時に捕吏の追求急なるを知り、  
御所街道に遁走せんとし遂に捕縛せらる  
(冥途飛脚)(實説は寶永七年極月五日死刑)

**ちよ** 阿千代 山城國上田村の農夫島田平  
右衛門の娘なり。大阪船油掛町八百屋半兵衛  
に嫁す。夫の留守中姑より離縁を迫られて實  
家に歸る。半兵衛之を知らず、遊女より歸る  
途に平右衛門方に立寄り、始めて事情を聞  
き、お千代を伴うて大阪に歸る。お千代其後  
も姑の虐待に堪へず、遂に夫と共に享保六年  
四月五日宵庚申の夜家を出でて生玉の勸進所  
にて情死す。享年二十七(心中宵庚申)

**ちりやくのすけ** 徳若智略之介。才  
若武略之介の兄にして故三位侍人富士丸の家

**ちりやくのすけ** 徳若智略之介。才  
若武略之介の兄にして故三位侍人富士丸の家

臣なり。年頃の祝儀に大内にて萬歳樂を奏し、津の國の福神に參詣して歸る途に、富士丸の姫君瀧高が大見縣主時景に懇せらるるに遭ひ、直に時景を追捕ひて姫君を救ふ。後、姫君及其愛人吳服中將雪枝の行方を誘はれ、木津の渡にて彌介狐に遇ふ。大和狐に誘はれて、親王の御前に出て添き御説を賜はる(天鼓) **ちゑもん** 治右衛門。大阪城江の口入業なり。「とくべま」を見よ(心中重井筒)

**ちんしはう** 陳芝豹。散騎將軍甘輝の母方の叔父なり。雲南道硯石山の麓に住す。或日阿克將より利を以て誘はる。其夜甘輝永感帝と共に來り便る。陳芝豹これを阿克將に密告して歸る途中、幽水堤にて甘輝に斬付けられ、悪心を慄怖して阿克將の人相を教へ、甘輝をして阿克將を殺さしめて絶命す(國性爺後日合戦)

**つう** 小野阿通。松下嘉平次の娘なり。惟任判官光秀の養女となり、春長の恩香忠の妾となる。春忠阿通を伴うて花見に愛宕山に赴くや、光秀反して春長・春忠を試す。阿通乃ち春長父子の首を携へ、春長の御誓所を訪うて入城を拒絶せられ、遠州濱松の父の許に歸る。或日嘉平次・真柴久吉を連れて歸り、已嘗て光秀反逆の一味として加判したるの故を以て、阿通をして己を銃殺せしめて阿通の武功となし、阿通の胎内の子は春忠の胤なれば久吉をしてこれを守立てしめんとす。然るに阿通は父を銃殺するを拒み、俄に蘆氣つきて分焼す。阿通はなほ父に強ひられて銃を講取るや、纏て我胸に當て銃聲一發死を遂ぐ(本朝三國志)

**つかさのまへ** 司の前。在原行平の室

なり。行平と松風と情交あるを嫉妬して、兄の落丸に憤懣を明せしが、後行平を尋ねて西の宮に來り、御樂を廻して宿を借り、行平に遇うて嫉妬したるを詫言(松風村雨東帯巻) **つがわか** 都賀若。葛木島主の子にして阿通の弟なり。十三歳の時政若と共に父の許に馳來つて、物部守屋既に内裏を攻破つて公卿の室を捕へ去れることを進言す。父之を聞きて、味方の軍の意氣沮喪せんことを恐れ、伴り怒つて二子を勸諭す。二子相共に守屋の副將引削勝海の軍を攻めて、夜の熊王・六田の死を殺しし母の月益御前を救はんとして、川勝に捕へられ、母の戀文を見せられて憤怒す。然るに其戀文は下より上に逆説して二子を思ふ情の切なるを訴ふるものなりしかば、川勝感に堪へずして味方となり、二子と共に守屋を河内國稻村城に攻めて之を滅す(聖徳太子繪傳記)

**つぎのぶ** 佐藤三郎兵衛繼信。出羽國佐藤庄司の子にして忠信の兄なり。源九郎義經に仕へ、平家追討の爲屋島に向ふ途に、鷲屋三郎に遇ひて源平兩軍の様子を聞く。かくて屋島の合戦に義經の身代りとなり、能登守義經の矢を受留めて死す(津戶三郎)

**つきますつごん** 月益御前。葛木島主の妻にして政若都賀若の母なり。物部守屋に捕へられて志記の山館に幽閉せらる。或日監視奏川勝の袂に鞭書を入る。川勝之を披見して月益の不貞を卑しむ折しも、垣を破つて闖入する者あり。之を捕ふれば月益の二子なりければ、月益の不義を語つて之を痛罵す。二子憤怒して母を刀の背にて打つ。月益涙な

がらに述べて曰く、若し落ち放つても鞭書は妾一人の不義と戀文のやうに書きしかども、これには二様の識方ありとて、下より上へ逆讀すれば、二子を思ふ情の切なるを訴ふるものなりければ、川勝感に堪へずして誤解の罪を謝し、心を酬して天皇の御味方となる(聖徳太子繪傳記)

**つぐなは** 淡路織細。逆目王子の臣なり。葛城大君・花照姫を奪ひ、金輪五郎今國に追撃せられて輿を捨てて遁る。後、王子の殿中にて今國に首を抜切らる(天智天皇)

**つくらにふだう** 津藏入道。曾我の下人鬼王の父なり。海野小太郎氏に捕へられ、伴つて熊野別當辨真よりと稱す(百日曾我)

**つちまる** 小野土丸。山彦王子の道士なり。玉世姫の家を襲撃して捕籠久馬平に相伏せられて殺さる(用明天皇廢人經)

**つな** 渡邊綱。源頼光の四天王の一人なり。按察左大將早岑が藤原女御の御車に暴行を加へんとするを制止し、また壬生の里に藤原女御の禮殿に行く。羽香伊賀久國を其宅にて捕縛し、按察早岑の居城を攻めて之を滅す(弘徽殿弱雛家)

保護を殺し、市原野の戦に鬼岡丸を斬り、源頼平を生擒す。また葛城山に土蜘蛛退治の軍に従うて武功を立つ(關八州戰馬)

**つな** 綱。もと池田宿に熊野と名乗つて遊女を勤め、平宗盛に請出されて其妾となりしが、後縁結となつて云ひ、宿王丸の髪を結び、河津祐重より貰ひたる弓懸を與ふ。曾我二子が工藤祐經を斬つて死するや、綱鎌倉に召出され禮衣を着て行く。頼朝其志に同情して領地を與へ、曾我二子の菩提を吊はしむ(加曾曾我)

**つねかげ** 佐野源藤太常景。梶原景時具季の知行を返み、熊の柵を折つて踏みこじりしが、忽ち梶原の死體に祟らる。また時定征伐の臨に逆灌の説を立て、天女丸に冷笑せられて大に怒り、これより時定の一味となり、天女丸を殺さんとして伊豆の御崎に陣を構へしが、戦敗れて房州探題に殺さる(最明寺殿百人上臈)

**つねこのひめ** 恒子姫。大納言藤原爲光の娘にして弘徽殿女御と申す。花山天皇の寵遇を得給ひしが、數多の官女に嫉妬され、病を得て早世し給ふ(傾城酒吞童子)

**つねとき** 難波十郎經時。平氏の家士

なり。足輕二十人を率めて夜襲をなし、五條の橋上にて牛若、辨慶を討取らんとして、牛若の家来喜三太に殺さる(孕常盤)

**つねよ** 佐野源左衛門常世。佐野政常の子なり。叔父常景に知行を横領せられて浪人となる。鎌倉勢揃ありと聞き、妻に馬の口を取らせて赴く。「ときより」の條を見よ(最明寺殿上人上願)

**つづらのだいじん** 圓大臣。娘中孝姫を安康天皇の女御に奉り、家臣諸宗等と共に悪行多かりしが、遂に落着して海賊的の漁夫となり、浦島太郎久壽の船を大島沖に要撃して殺さる(浦島年代記)

**つるくに** 玄上廷尉之介鶴國。養大臣種房の家臣にして性剛直なり。雄略天皇の命を奉じ中帯姫を預りて鄭重に護侍す。或日親繼姫逃げ來られ、尋で諸宗攻入る。鶴國奮戦して諸宗を殺す。後、雄略天皇に降從して葛城山の狩に出で、肩輪王を退治す(浦島年代記)

**つるさば** 鶴澤。新田義貞の郎黨名成八郎爲勝首目と伴りて琵琶法師となり、鶴澤と名乗つて成良親王が舟が谷に幽閉せられ給へるに仕よ。或日狂女や梅來つて醜陋を、鶴澤逃げ迷ひて大般若の唐櫃中に隠れしを、やよ梅をその唐櫃に錠を下す。是時番所の大将大場の前司來應す。鶴澤唐櫃を破つて出で、大場と闘う之を追散し、成良親王の落ち行かぬに追付き、入間川の渡にて追撃し來れる敵と戦ひ島戸太郎を生捕り、義貞等と會す(相模入道千正大)

**つるわか** 鶴若。佐藤次信信の子なり。年

人名部

少の時・母・叔母乙若と連立ちて三河國に赴き、根原景高が名馬厩舎の足ら洗へるに遇うて其馬を奪ひ、義經の假駕せる奥州高館の城に赴く(源義經將基傳)

**ていしりゆう** 鄭芝龍一官。明の忠臣なり。倭臣を斥くべきを言上して逆謀に觸れ、去つて日本に來り肥前國平戸に住し、名を老一官と改め、平戸の漁夫の女を娶つて和蘭内を生む。是時明朝は逆臣李詔天及び韃靼兵に攻められて滅亡に瀕す。鄭芝龍乃ち妻子を伴うて明に渡り、鄭子城主甘肅に預つて明朝の復讐を圖る。されど年老いて爲すなきを慚ぢ、單身南京城に赴き、李詔天と決闘せんとし生捕られしを、國性爺・吳三桂・甘肅に救はる(國性爺合戦)

鄭芝龍東寧島に渡り、土民をして駙馬鐵平の幻術を信せしめて其收得金の上前を取り、國性爺の部下の者に擣められて生獄門の刑に處せらる。國性爺いかにもして鄭芝龍の罪を赦さんとす。や、鄭芝龍理非を説き、土民の罪を赦すべきを切言して自刎す(國性爺後日)

(序云、實傳、鄭芝龍字は飛黃。明泉州府南安縣人。天啓三年平戸の田川氏を襲つて成功及び七右衛門を殺つ。崇禎元年明國亂る。芝龍乃ち清兵と戦つて屢之を破る。後、太祖の末裔華劔を奉じて南方に據り、臺灣を根據として海盜となりしが、勢衰へて清に降り永曆十五年殺さる)

**ていせいこう** 「わらうなひ」を見よ。

**ていほふ** 貞法。大阪本町新物店芝屋の隠居なり。「じろべゑ」の條を見よ(今官心中)

**てうしまる** 調使丸。聖徳太子の馬丁なり。太子調使丸を別を告げて林太官に登ら

る。調使丸は太子の妃清姫の行方を尋ね、奈良手向山にて姫に遇ひ、太子の梵天官に赴かれたるを語る。是時弓削廣海の兵に攻圍せられしが、遷居の助を得て敵を追拂ふ。かくて後聖徳太子の軍に屬して、物部守屋を河内國稻村城に攻めて滅す(聖徳太子繪傳記)

**てぐるま** 犖。阿閉郡領諸宗の妻なり。夫が玄上廷尉之介鶴國に斬付けられて危きを見、助太刀せんとして夫に叱らる(浦島年代記)

**てぐるましんわう** 犖親王。萬歲鏡の催ありし時、太見縣主時景より故三位侍人留士丸の娘遠瀨の才色比なきを聞召され、遠瀨を召して宮仕せられ、且遠瀨が家寶の天鏡を獻上せよとの詔あり。後、和州三笠山の麓に細殿を造り乞巧鏡の音楽を催せらる。時景父子の悪行暴露し彌左衛門孤に殺さるるや、親王は時景に苦しめられし吳服中將毒杖等を機に思召されて有難き細説あり(天鏡)

**てつどうら** 鐵銅丸。倭藤太秀衛の家士なり。琵琶湖の化物に變装して悪事をなせる養輪平郎重成を殺し、清浦の侍女に扮して將門の居城に入り、厥の隅に臥し、將門の下人どもが女と思つて書寄を投付け、豫て破の中に隠し置きたる伏兵と共に將門の軍を破り、清浦を保護して武功を立つ(傾城戀物語)

**てなづち** 手摩乳。出雲國織の川上の長者にして、赤巻鳴尊の如宿田姫の父なり(日本振袖始)

**てるてひめ** 照手姫。横山郡司信久の娘なり。小栗判官兼氏と戀交を通じ、兄の三郎重次に殺されんとせしを鬼王に助けられて遁

走し、美濃の宿屋長に買はれ、常陸小萩と名乗つて水仕女となる。或日藤原上人の供養の車を挽きしが縁となりて兼氏と邂逅し、夫妻相伴うて藤澤寺に妾歸す(當流小栗判官)

**てるとり** 長尾輝虎。越後の國守なり。もと長尾景虎と云ひしが、上洛して足利將軍義輝に謁し輝虎の字を貰ひて輝虎と改め、歸途大津にて甲州の國守武田信玄と同船す。是時信州の國守村上義清の使者來り、晉物を出して輝虎の娘衛門姫を所望す。輝虎其無禮を怒つて晉物を返す。身た越後より使者來り、信玄の子弟頼と衛門姫と誂落したるを報す。輝虎烈火の如く怒り、信玄に對し信州を戦場として甲越の兵雄雄を決せんことを約す。かくて信玄と初度の戦に敗れて諸將と謀る。諸將曰く、敵の軍略は山本勘介より出づるならんと、輝虎曰く、直江實綱の妻は勘介の妹と聞く。實綱何故に勘介を我に屬せりしにして既に使者を出せりと云ふ所に、實綱の妻來つて勘介の母妻の來れるを告ぐ。乃ち之を殿内に隠き、輝虎手づから配膳するを、勘介の母無禮の言動をなして其體を觸飛はす。輝虎怒つて刀に手を掛けしが、實綱の臣によつて思ひきを得たり。輝虎は勘介を許せんとせんと思ひしが、勘介の母死を以て義を立てるや、其心に感じて斷髮し法名を謙信と名乗る。甲州會盟の缺乏に苦しむを聞き、輝虎乃ち倉庫を送る。而も甲越の兵結んで解けず、四度の合戦互に勝敗あり。永祿四年九月十五日度目の戦に謙信軍掛りの陣法にて信玄の麾下に肉薄し、信玄を斬付けし際、別に一信玄ありて名乗り出づ。先に斬付けられしは勘介が主君に扮せしものなるを知るに至つて、謙信深く其忠節



に感じ、甲越兵を解いて相和す(信州川中島合戦)

てらふき 布引流次郎照房。布引先生勝成の子にして左馬頭勝虎の弟なり。兄と共に持統天皇を幽閉せる年余の番を勤めしが、春彦より夏仁親王を尋出して秘すべしとの命を受く。是に於て照房は夏仁親王を助け奉らんとし、兄と口論して父より勘當せらる。これより照房は親王を尋ねて笠置山に入り、人家を求めて宿を借りしが、此家の主人は萬九郎と云ひて山城を働か、我妻の巻簾を殺したることを知り、格闘して萬九郎を刺ししが、この時夏仁親王出でて照房を庇り給へるに驚き、直に萬九郎を引起して罪を謝し、共に義兵を擧げ、夏仁親王を擁して飛鳥の里に赴き、持統天皇の軍と合して春彦の軍を攻破つて之を滅す。時に大寶元年四月下旬(持統天皇御軍法)

てんざ 傳三郎。京都島原遊廓舞鶴屋の主人なり。名古屋山三春平が不破伴左衛門を斬つて捕吏の取調を受ける際、傳三郎は稚老のお宮と共に春平を辯護して之を助く。また狩野四郎二郎就言の五日後に其宅を訪つてお官の死を語つて悲しむ(傾城反魂香)

てんざぶらう 傳三郎。大阪北久太郎町古道具商置屋長兵衛の妾お今の弟なり。長兵衛の娘お龜に懇懇し、長兵衛の家督を奉はんとして奸策を廻し、お龜の夫與兵衛を陥る(ひぢりめん卯月紅葉)

お龜の死口を密せて、傳三郎等の悪事暴露すらや、長兵衛の姉大に怒り、杖を以て傳三郎等を鞭打つ、長兵衛に迫つて傳三郎を放逐せしむ(卯月調色)

てんちゆうばう 天仲房。福徳園守乃那六家王近習の臣なり。臺漕せうほが池を漂駈す奉行を勤めて池中より大鼎を引上ぐ。また六安王と心を合せ暴民の行多かりしが、遂に朱一貫に滅さる(唐船嶺今國性爺)

てんない 和田傳内。播磨の人にして幼名を石松とし、こかんの乳兒妹なり。こかんを連れ歸らんとして大阪に來り、こかんが堂島新地平野屋の遊女となれるを聞き、和泉屋にこかかんを招き、こかんの歸國を謀はる謀めて意見す(心中又は水の朔日)

てんによまる 天女丸。北條時頼の嫡子にして時宗の幼名なり。大江僧正廣辨より源義經の再誦なりと言はる。宇都宮新庄司友平を師範として文武の道を勵む。北條時定叛して伊豆の御崎に據るや、天女丸其討手に向ひ、蚤に淺瀬の案内をさせて海を渡つて之を破る(最明寺殿百八上願)

とうがん 等殿。六角左京大夫頼實の抱紳師雲谷の弟子なり。雲谷と共に土佐又平を攻めて敗績す(傾城反魂香)

とうがんとしやう 黒谷の東岸和尚。おさん茂兵衛不義の罪によつて刑せられんとする時、馳付て兩人を救ふ(大經師昔廳)

とうだ 藤太。淨瑠璃姫の母の甥にして無頼漢なり。淨瑠璃姫と牛若との説言を聞いて嫉妬し、六波羅よりの使者と伴りて姫を追拂ふ。峯の樂師の篋谷にて姫を捕へて口説きしが、己が意に従はざるを怒つて之を殺し、姫の侍女をも殺さんとす。三條吉次高直と戦ひ、遂に樵夫に撲殺さる(十二夜)

とうだいのふ 藤太夫。備前國兒島郡藤戶浦の鹽竈なり。娘の待宵時雨が佐佐木三郎盛綱に救はれたる禮に藤戶浦の淺瀬を案内せしが、また人に教へよせんと思はれて盛綱に殺せられて海に沈めらる(佐佐木先陣)

とうない 關藤内。北條時政の番所に詰らぬ、八重姫を殺して所持金帯ひしが、怨靈に祟られて死す(頼朝伊豆日記)

ときあきら 齋明。藤原保輔の子にして性凶惡なり。父と共に兇賊將軍太郎に一味し、江文宰相爲成の邸に闖入り、擊馬の毒を掠奪せんとして渡邊綱成田公時に殺さる(關八州驚馬)

ときかけ 太見縣主時景。醍醐王の御意を受けて故三位侍人富士丸の家人智略の介武略之介の兄弟を召し、大内にて萬談樂を奏せしめ、故富士丸の娘瀧高姫の才色比なきを言上り、親王より瀧高姫及其家寶の天鼓を所望せらる。時景家に隨り妻の言を聽いて心變じ、己が娘夕映を瀧高に代へて宮仕せしめんと思ふと天鼓なきに倒し、瀧高姫を贖して巴九と共に狐谷に出でしめ、奸策を以て天鼓を奪はんとして成らず。堺の太寺に押寄せ、瀧高に化けたる彌介狐と格闘し、天鼓を奪はんとす。折しも丹波の稻荷社の千年狐人に化けて現はれ、時景父子の悪行を罵つて之を撲殺す(天鼓)

ときさだ 北條式部冠者時定。北條時頼の弟なり。時頼が禪定三昧に入るを見てりて叛し、天女丸と戦つて敗績し、佐佐木廣綱に射殺さる(最明寺殿百八上願)

ときつな 直江大和之介時綱。越後の國守長尾藤虎の家士にして、直江山城守實綱の弟なり。主君の姫婿綱に陪從して信州諏訪明神に參詣す。姫武田勝頼と縁に陥り、村上義清に横簾懸せられて行方を失す。時綱乃ち姫を尋ねて上州黒髪山に赴かんとする途、中雨に遭ひて辻堂に宿り、腰なす瓢を傾け酔うて臥す。其傍に臥せる男鬚を奪うて飲み盡す。時綱怒つて所合はんとせしが、よく見れば知合ひの武田信玄の家士の高坂源正政信なりしかば、これははばかりに心打解く。是時適に兵火を認め各駆け赴く。これより大越の戦場に解けざりしが、遂に相睦となり、時綱姫君の御供して目度く局を結ぶ(信州川中島合戦)

ときは 常盤御前。梅津源左衛門正國の女、源義朝の妻なり。義朝殺されし後、子を清水親吉に祈り、その下向道に五條の橋に於て牛若と遇ふ。後、清盛の子を孕みて切腹せん。清盛大に怒つて酷刑を命ず。是に於て常盤刑場に引かれしが、牛若辨慶に救はる(孕常盤)

長田庄司に召捕られて護送せらるる途中金吾九盛長に奪返され、三幼兒を伴うて大和路に落ちんとし、雪中伏見の里に行暮れ、家を探りて一夜の宿を頼みし、断られ其軒下に臥し、三子交も衣を脱いで母をいたはる。宗清に追捕はれてまた雪中を迷ひ行く(源氏烏帽子折)

牛若丸が數馬山東光坊の許を去りたることを聞き、その行方を案じて、乳母子種彦伴ひ京七條朱雀の住家を出で、牛若を尋ねて鏡の宿

に來り、強盜藤入道村速等に捕へられて殺さる(十二段)

源義朝の妾なり。義朝殺されて後平盛の妾となり、病と稱して朱雀御所の深淵に籠り、腰元横笛、紫上羅鶴の兩人をして往來の人を招き入れしめ、色を以て心を試し、源氏に従はぬ者を横笛をして斬殺さしむ。或日彌平兵衛宗清頼冠にて入り來れるに抱付て痛罵せられ、深く恥ぢて實を語る。是に於て宗清の情によりて横笛、羅鶴と共に清盛の邸を脱走す(平家女護島)序云、朱雀御所での流行は、吉田御殿の俗説(五〇九頁、柏屋通れば云々の條を見よ)を脚色したるものなり)

ときより 關谷左京時平

近衛家の養子となり、養母と心を合せて月光を殺さんとし、月光の師事せる日像の寺院を襲撃して見島三郎高則に敗られ、尋で日像、月光等を舟に乗せて播磨沖に沈めめとして成らず。また雨夜の前に遇うて口説けども意に従はざるを怒り、遂に養母を弑して佛罰を受く(大覺大僧正御傳記)

ときまさ 北條四郎時政

伊豆三島明神に參籠して、夢中に源頼朝を助けて宸襟を安めまらせよとの告を蒙り、其歸途頼朝に遇うて我館に伴ふ。時政の娘朝日の前、頼朝と通す。時政取て咎めず心傷に喜ぶ。かくて後頼朝を助けて平家討伐の兵を擧げしむ(頼朝伊豆日記)

かしむ(吉野忠信) 丙午生れの女子を娶るは男子に不祥なりとて、閉白傘賣の女と萬壽との婚約に異議を主張す(佐佐木先陣)

ときむね 曾我五郎時致

海野小太郎行氏が津藤入道を害して鬼王及び花野を捕ふ。時致頼朝と伴ひて傾城殿を讀み、海野を誑して其捕へられたる者を取戻す。また喜瀬川の龜菊に逢うて、頼朝が工藤頼經の假屋に行かんとするを思止まらしむるやう頼み、其鬼報じとして、頼經を斬つて木櫃を迷げたる後は龜菊の手にかかりて死すべきを約し、建久四年五月二十八日の夜富士野の狩場に亂入して頼經を討ち果し、龜菊と見誤つて女姪せる五郎九に生捕られ刑に就く(百日曾我)

幼名を宿王といひ、十郎祐成の弟なり。工藤祐經が石打の祝儀に托して祐成を殺さんとせしかば、宿王を免けて祐經を懲し、母に叱られて勘當を受く。また宿王出家を嫌ひ、少將に譴まへられて之と契り、元服して五郎時致と稱す。禰助坊の執成しによつて母より勘當を赦され、慙不俱天の仇を報ぜんとして少將等と訣別の宴を大藏に張り、其夜の夢に京小二郎を殺す(曾我五郎兄弟)母の意に従つて宿根の寺に登りしかども、僧となるを嫌ひ宿に寺を脱走して元服し、母より勘當されて自害せんとす。是に於て母勘當を赦せんとする決心益固し。頼朝が御狩馬揃の場に祐成、勝重と共に馬を牽き來り、祐成の外舅の仇番堀忠太夫を殺す(大藏虎)出家を嫌ひて宿根の寺を忍び出で、亡父の廟所相模寺に參詣し、母に遇ひ僧とならざるを

叱られて勘當を受く。是時井原左衛門經が河津祐重の墓を取除かんとするを見、怒つて經の僕十餘人を殺し、近江小幡木を捕へて耳鼻を殺き、經を追拂ふ。かくて後亡父の仇工藤祐經を大藏遊郎部屋に担ひしが、朝比奈義興に遇はれて其意を果さず。祐成と虎前前の執成しによつて母より三日間の勘當を赦され、且小幡を廣ふ。かくて後富士裾野に赴き、下人鬼王、側三郎に託して乗馬に形見の品物を添へて母の許に歸し(形見の品物は舞之本、夜討曾我に出づ)勘當の日延を懇請し(後世の祈禱に三郎經を讀誦せんとして虎)

ときゆき 坂川藏人時行

坂田前司忠時の子なり。萩野屋の遊女八重桐と馴染みて父より勘當を受く。父が物部平太に殺されより平太の行方を尋ねて仇を報ぜんとし、八重桐と離別し源七と名乗つて煙草賣となり、選堀姫の侍女より三味線の一曲を所望せられて之を響じ、八重桐と邂逅し其意に感じて自刃せしが、其魂魄火焔の轉風となつて八重桐の胎内に宿り、金時となつて再生す(龜山姥)

河津三郎祐重の次男にして幼名を宿王と云ふ。僧となるを嫌ひて老母より勘當を受け、宿に北條時致の館にて元服し、北條の供物を連れて馬に鞭を、曾我の里に歸る途中、女乗物に暴行を加へしが中に老母あるを見と仰天し、後悔して置る。時政等に勘當の憂苦に堪へず、曾我の里に行き、門内より奥を見入りし折しも、老母が祐成の祝儀に祭を作りて端午を祝はんとしして白を挽きけるが、立つて奥に入りし隙に飛入つて、母の手助けにも力を任せに白を挽過す音を見付られ、恐る恐る逃去らんとするを呼留められ、勘當は眞意にあらざる旨を言聞かざる。是時狭父重保提原源太入り來る。母は心ならずも時致を叱責し、勘當の實を見せしが、重保の執成によつて母子盃を交はす。かくて復時致富士

裾野の假屋にて近江小幡木を斬り、其夜彌朝の假屋に亂入して亡父の仇工藤祐經を殺し、なほ頼朝の懸所近く亂入して五郎九に捕縛せらる。然るに五郎九の言語無敵なるを怒つて縛繩を切り、朝比奈義興に搦められんことを請ふ。頼朝、時致の孝心勇武に感じ、縛を解いて自刃せしむ(曾我虎皮履)

ときより 北條時頼

祝髮して最明寺道

有名だつた煙草屋源七に因んだものである。浪花青樓志(寶曆九年刊)大内、源七の條に「佐渡島町二丁目北條町、煙草屋七といふ者、飄散町貳丁目街頭小店を構、匂ひ入りし、酒を賣く、元來美色好く金線練の如し、世人大内煙草と呼び世に發行す。大坂中大内藩の權輿なり、享保の末元文の初まて當所に住せしに、諸店大内器賣るやうになる故にや、當所を退きて今の住所不詳)」

崇といふ。宇都宮新庄司友平を嫡子天文九の師範となし、弟時定に政務を委ね、自ら禪定三昧に入ると稱し、微服して諸國行脚の途に上り、佐野の里にて大雪に遭うて、佐野源左衛門常世の妻の僥遇に預る。後、御臺所が鎌倉勢ありて常世夫妻も馳せ赴く。時頼夫妻を招きて嘗て厚遇に預りしを謝し、その返禮として常世の父の仇常景の首を見せ、且本領安堵に梅田・櫻井・松枝の三箇の庄を添へて之を授く(最明寺殿百人上臈)

とくびやうゑ 徳兵衛

大阪内本町野田平野屋久右衛門の手代なり。主人は徳兵衛の叔父にして徳兵衛に妻の姪を娶らせて家業を譲らんとし、銀二貫目を徳兵衛の母に與へて其婚約の證となす。然るに徳兵衛は堂島遊廓天満屋のお初と馴染みて叔父の意に従はず。婚約の證銀二貫目を主人に返済せんとして母より講取りしも、悪友油屋九平次に欺かれて奪はれたる上に、罵詈雑言せられて憤懣に堪へず、遂にお初と共に身の不幸を悲んで曾根崎の森に情死す。徳兵衛年二十五(曾根崎心中)(實説は元禄十六年四月七日の情死)

とくべゑ 河内屋徳兵衛

故主人の妻阿澤の夫となりて主家を嗣ぐ。阿澤其子與兵衛の放蕩無頼を怒つて放逐するや、徳兵衛は筋向ひの豊島屋お吉を訪うて、與兵衛を憂慮する旨を告げ、錢三百を預りて女とはなしに與兵衛に與へ下さるやう頼む(我油地獄)

とくべゑ 徳兵衛

大阪萬年町紺屋の入婿なり。遊女お房に馴染み、お房の難を救はんとして堀江の口入業治右衛門より丁銀四百目を借りしも、妻お辰の貞實に感じて其身の非を謝しその金を妻に渡し、井筒屋に行きて

お房と密會し、互に身の上を歌けるをお房の抱手に悟られて、火燵責めの苦を受けて益世をはかなみ、お房と共に家を忍び出で、高津上鹽町大佛殿動進所に走つて、寶永四年十二月十六日朝まだきに情死す(心中重井筒)

とこなつ 常夏

本多次郎近經の妻なり。工藤経經の妻阿古屋の前と離縁をなす(曾我會村山)

としかね 淡路七郎俊兼

淡路前司兼成の子なり。主君吉田少將行房の金一萬兩を預りて、之を遊興に浪費して追放せられ、猿島豊大と名乗つて商人に寄附し陽田川畔に住す。或日勾引したる男兒を毆打して死に致す。是時故舊の縣藤正武國來つて吉田家の悲運を語り、若君権若丸の行方を尋ね、俊兼聞いて大に驚き、さて己が撲殺したる男兒は権若君なるを知り、深く非を悔いて自刃し、其魂魄天狗と化し、嘗て比良天狗に頼み去られたる行房の子松若を探し得て、之を松若の母の姪女に渡す(養生圃田川)

としつな 金剛兵衛利綱

京都錦小路中納言冬通卿の家人なり。冬通卿の門前にて播磨任と喧嘩して馬より引下す。姫君珍菊の帷帳將軍に與入ある際、利綱其供となつて行き、まづ帷帳の邸内の様子を伺はんとして興の側を離れたる間に、諸任の邸等に擧はれて姫君語共に興を奪去らる。利綱興の行方を尋ねあぐみし折しも暗中興を昇ぎ来る香あり。即ち飛揚つて其興を奪へば世戀御前の興なり。さてこれに驚く時しも十二夜の月出で、諸任の邸等ども珍菊の興を昇ぎ來つて、世戀御前の興と取替へんといひ、利綱怒つて即ち興を殺し、興ごめに二人の上臈を擡びて我

家に歸る。後また諸任等に擲撃せられしも深瀧二郎と協力して之を退け、珍菊君・世戀御前の供をして帷帳を尋ねて信州に下り、戸隠山の悪鬼退治に武功を立つ(抱剣刺本地)

としつな 民部太郎俊綱

散位紀有常の奴なりしが、妹有常の室となるに及んで俊綱重く用ふる。俊綱不在中妹が中官高子の手代りたらんとし泊瀬寺に赴きしを俊綱歸つて其由を聞き、直に泊瀬寺に馳せて介錯し、妹の首を桶に收めて山を下る際、同僚の桂吾吾廣國に結られて格闘に及びしが、其心知れ合ひて即ち和す。かくて後惟新親土が清和天皇と御位争の相撲勝負に負けて暴行せんとせらるるを、廣國と協力して親王を擁む(井筒業平河内通)

としゆき 齋藤文治年行

北條高時に仕へて犬奉行を勤む。或日犬輿に附隨して行く途に、里見義助が給合姫の輿に附して行くに出資ひ、犬輿に對して下馬せざるを咎めて喧嘩す(相模山道千足犬)

となせのつぼね 戸無瀬局

建禮門院の侍女にして加賀郡司師高の姉なり。養和元年九月九日建禮門院の御使となりて平重盛の邸に至り、北山に箕狩の催あるやう御意を傳ふ。養和建禮門院の御代妻として志気辛崎の大明神に参詣し、師高の強姦となれるに描められしが、左京之進義次に助けられて共に都に上る(城歌加留多)

とねり 遠坂舍人

大和國宇陀郡龍門家の次女和琴を妻となし、以て龍門家を奉はんとし、龍門家の重臣舟越馬等と奸策を廻して遂に龍門家を奪ひしが、石川五右衛門が蓋照の刑に處せられたる場に於て憲法の爲に

沸返る釜中に擲込まれて斃死を遂ぐ(傾城吉岡築)

とねりのすけ 物川舍人之助

龍大臣の妾の子にして十八歳、自馬に曲乘して女の手宮を拾ふ(龍大臣)

とぶんくわん 杜文官

明永曆皇帝の武將なり。五府將軍石門福・繼繼に内應して反するや、杜文官之を甘肅に報告し、梅檀皇女を助けて國性節の後を追ひ勾容懸にて相逢ふ。時に賊將鐵故山の追撃急なり。杜文官防戦して斃る(國性節合戦)

とほやま 遠山

土佐將監光僧の女にして幼名を光と云ふ。越前氣比の遊女となりて遠山と名乗る。狩野四郎二郎元信の地に來り、奥州武隈の松を畫かんとして松の名木を尋め、遠山・四郎二郎に遇うて其秘傳を受け、且感敷を通す。遠山はかくて復讐方に流轉し、越前三國町にありては勝山と云ひ、伏見にては淺香山と云ひ、奈良の木辻にては三つの山と云ひ、京の島原にてはお宮と稱す。四郎二郎の恩人名古屋山三春平が不破左衛門を島原の大名口に斬り、お宮の辯護によつて殺人の罪を免る。而も善平固よりお宮が四郎二郎を愛して辛苦を嘗めながら夫妻となる期を待てるを知らず。爲に六角左京大夫の妾腹の女觀香の前を四郎二郎に配して其嫁約をなす。お宮失婚となり、靈死し、其魂魄留りて四郎二郎とお宮と成り、靈體相付らて紀州能野權現に詣つ(傾城反魂香)

とみふさ 橘右大臣富房

齊明天皇の勅使となりて白鹿明神に詣で、槍狩狩野氏久を捕ふ。また伊賀越の陰謀驚きて遁まず、尋で天智天皇に遇ふ(天智天皇)

**とほる** 河原左大臣源融。愛人青柳が殺されてより追慕に暮れ、快快として樂ます。浴泉坊の法印の媒介によりて、青柳に似たる鬘の前を見せ、その跡を追うて豊島の浦に下り、難の長者に雇はれて潮波となり、豊の前と共に出奔し、大江千里草に邂逅し、相づいて歸洛し、豊島の風氣を都六條河原の庭内に携して、裕福に世を終ふ(融大臣)

**ともかぜ** 高梨政太郎友風。高梨吉内左衛門友重の養子なり。友重一族の者と所領争ひに、坊門中納言兼雄が非道の裁判せしを恨んで兼雄を殺害したり。是に於て友風は養父が敵討に遺はんことを慮り、其身代りにならんとして自ら友重と名乗りしが、病に罹り氣暗に櫻塚に赴きて、櫻祭文を讀ま居たりしが、兼雄の子の教信より敵討の聲を掛けられ、敵より病身を討つは本意にあらずとて、全快の上勝負を決せんことを約す。これより友風深く擁養す。偶中秀秀光等が熊源太等に追撃せられて遁れ來り、女子供を隠まはれんことを懇請す。友風告ぐるに、我は人より預れる命なれば不應のことありては申謀なしとて懇請を拒絶せしが、熊源太等の暴戾を見るに忍びず、秀光に助太刀せんとして病身の婦に從れ、中山寺に葬送せられしが、是時熊源太等の爲に横死を遂げたる藤原孝房の室の亡魂友風の死骸に入る(實古教信七壽題)

**ともむね** 箕田二郎繼。渡邊綱の從弟なり。源頼朝・頼平の家督足めの時、小蝶の色香に迷ひ愛に絶つて戯る。小蝶即ち七首を披いて纏の烏帽子懸袴を切つて、座中不行跡の者あるを叫ぶ。纏深く愧ぢて自刃せんとししが、頼平の處置によりて事なきを得たり。か

くて後頼平、兒戲將軍太郎に一味して、渡邊綱に縛せられ死罪と定まるや、纏死を以て頼平の改心を促して之を救ふ(開八州警馬)

**ともひら** 宇都宮新庄司友平。北條時頼の嫡子天女九の師範となり、義經の衛狀を讀んで天女九を教誨す。北條時定叛して伊豆の御崎に據るや、天女九と共に之を攻めて破る(最明寺殿百人上黨)

**ともやぎ** 友柳。長田庄司宗宗の下人なり。鎌田兵衛正清の酒宴の席に出で、餅子を正清に投付けてむす組みしが、正清に引伏せられて刺殺さる(鎌田兵衛名所彦)

**ともゑ** 巴丸。木曾義仲の妾なり。義仲死したる後相田義盛に嫁して朝比奈三郎義秀を生む。鎌倉御所に阿古屋の前と常夏とが鹿論せる時、巴御前兩女を獨んで引出す(曾我會稽山)

**ともあま** 巴丸。吳服中將雪枝の家人なり。鳥追とて太見縣主時頼の家に忍入り、雪枝の愛人通御殿を奪はんとし、また時頼の好妾にかかつて還歸せんと共に狐釣に出づ。この時能勢稻村の千年狐出でて、時景懇心にて還歸の家實の天敵を奪はん爲に汝等を狐釣に出したるを告ぐ。折しも時景主従公卿に扮して來り、親王の御使と伴つて天敵を奪はんとして、還歸の家人智略之介武略之介の兄弟に妨げられ、巴丸は聯合の小坊主孤に誘引せられて靈親王に謁し、有難き御錠を賜はる(天敵)

**とよふね** 桃岡染五郎豊舟。天慶年中播州法華山觀音寺の西王母が桃を大内に獻ぜんとして都に上る途中、大納言民部卿藤原元方の次女二位の君と遇つて相思の仲となる。

豊舟が西王母の桃を獻じたるを疑ひ、元方の長女薄雲の體となつて元方の家督を嗣ぐや、繪あり。かくて其御言の時豊舟は薄雲の醜女なるを見て逃出さんとして二位の君に遇ふ。薄雲嫉妬に燃えて紛擾を起す。これより豊舟は放浪の身となり、大和郡山にて家來の鷹助海に邂逅す。この時二位の姫薄雲に追はれ來つて締殺さる。豊舟怒つて薄雲を殺し、身の不幸を嘆いて剃髮し、勝海の妻小萩が室津の遊女となれるを訪うて、客に請出されんとする由を知り、鷹と己が小萩に懸懸せらるやうに見せて、客の心を損せしめ以て之を救はんとして、却つて勝海に敵討せらる。然して身請の客といふは敵の土師別當村正なりしかば之を斬殺す。かくて後製靈の五歌仙の教にて心開け、二位の姫の形見品を焼けば、其烟中に二位の姫の髮鬘たる姿を現す。これより奈良興福寺に詣で、南大門にて父子の稀若及び勝海等に遇ひ、尋で製靈の五歌仙の勅使となつて來るに遇つて本領本官に復することとなり、寶藏の中よりは二位の姫が播州法華山觀世音の美女と現じて佛力を語る(日本西王母)

**とらごぞん** 虎御前。大鷹の遊女にして曾我祐成と契る。祐成が亡父の仇工藤祐經を殺さんとて富士禰野に赴きし後、沈邊に隠せる畫面を見て直にその跡を追ふ。曾我三子本懐を遂げて刑に就きしを三子の弟の禰師坊に知らせんとし、師坊に出で、松江の里にて禰師坊が海野小太郎を召捕られたるを聞き、畫面を引返して、雙を切り尼となつて祐成の畫面を弔ふ(百日曾我)

小柴郡司の子にして幼名をよし姫と云ふ。大鷹に賣られて遊女となり虎と名乗り、曾我祐成と懇親を通す。或日兄の小柴勝重、虎を尋

ねて來り、父の非業の死を告ぐ。是に於て兄妹父の仇を報ぜんとして跡を脱走する途に祐成と遇ひ、三人共に宿根なる五郎時宗を訪ふ(大鷹虎物語)

曾我三子が亡父の仇工藤祐經を殺さんとし、富士禰野に赴き、虎乃ち祐成の母及び少將と建立して其跡を尋て迷ひ出で、母及少將朝の出發延引する由を聞き、虎心中に今夜曾我兄弟をして仇討を遂げしめん爲に、法華經普門品を誦請して雨を乞ひたる驗ありて俄に大雨となる。時に建久四年五月二十八日、曾我會稽山

鶴岡八幡宮に詣で、愛人祐成が首尾能く敵討を遂げんことを祈念す。後、明兼少將と共に三河國岡來寺に參詣し、禰師坊の談話を聽聞し、上者を脱ぎて禰師坊に捧ぐ(曾我五人兄弟)

曾我の里に曾我三子の孝母を訪ひ、時宗の勸氣を敵さるやう懇請す。後、少將と共に富士禰野の狩場に曾我兄弟を尋ね行き、時宗が亡父の仇を報じて捕へられたる場に臨む(曾我八景) 或夜別駕妓の少將と共に秩父重保に掛けらる。其夜工藤祐經一味の多勢に包圍せられ、虎窟舌を噛つて之を退去す。後、少將と共に曾我兄弟の跡を尋うて富士禰野の狩場を彷徨し、近江小膳木に遇つて殺れんとせしを、人穴に逃入りて仁田四郎忠常に助けられ、祐成に逢うて永別を惜まざる。かくて後祐成が首を擧げて時政が召捕られて引かれる場に臨む(曾我虎が磨)

建久四年五月風雨烈しき日祐成を養うて富士禰野に赴き、曾我を母と遇返し、尋で曾我兄

人名部

弟に逢ひしが、是時夜廻の者に誰何せられて取上遂と伴りて遁る。工藤祐經の假屋に招かれ、祐成を手引きして内に入る。曾我兄弟が敵討の後、祐經の弟伊豆二郎祐兼に捕へられて頼朝の前に引出され、曾我二子の首を見て泣いて死を請ひしが、頼朝及び朝比奈義秀に宥められて泣く泣く退去す。かくて後曾我二子の弟の禰師坊を越後の國上寺に尋ねて下る。頼朝、禰師坊に命じて曾我二子の社を富士裾野に建てしむるや、虎少將頼主となり、西國四國の戰場の鎗馬を掲げて祭典を舉行す(加増實教)

**とらへいじ** 虎平次。熊源太の弟なり。兄と共に藤原孝房の室及び中務秀光等の波路の方へ落ち行くを追撃し、孝房の室を殺害するなど悪行多かりしが、遂に印南彌七郎に捕めらる(賀古教信七墓廻)

**とりみのさんみ** 鳥居三位。醍田明神の神主なり。春彦尊に一味して王妃長歌を搦めしが、橋立左衛門秋廣の魂と入りたる春彦尊に殺さる(特統天皇歌軍法)

**なかあき** 今川左衛門尉仲秋。今川伊豫守源貞世入道の倭の嫡子なり。京都に在勅中父の危篤の報に接して歸國し、父の枕邊に侍して、制詞條目一卷を譲り受く。いたく父の死を悲しみ、晋砥藤次を伴うて亡父の墓に詣で、愛人千鳥の前に遇ふ。是時叔父貞廣來つて荒川近平・大連寺勝房反心ありと稱して仲秋を欺き、尋で反旗を擧ぐ。仲秋、千鳥の前虎口を遁れて三河國岡崎なる松葉川に落ち延び、捕守の結城右衛門太夫種春に助勢を請へる際、貞廣の家士片桐才藏に追撃せられ、奮戦して才藏を殺し、大擧して駿府城に貞廣

を攻めて陥れ、了俊の跡を相續す(今川了俊) **ながうた** 長歌。吉野郡の紙屋福の阿惣の女にして、母に仕へて孝なり。夏仁親王の王妃に選ばれ、醍田明神にて誓束始の儀式を行へる際、春彦尊に一味せる神主鳥居三位に捕められしが、秋廣の魂と入りたる春彦尊に助けられ、吉野の里に歸つて風月と契を結ぶ。風月は夏仁親王なり。是時曾我法卿等に襲撃せられ、風月長歌と共に春日山に通る。かくて後夏仁親王と共に笠置山の窟に隠れて萬九郎に養はれしが、遂に悪人滅んで泰平の御代となる(特統天皇歌軍法)

**なかがは** 中川。足利將軍教興御靈所の侍女にして、藤内太師家治と陰通す。赤沼入道幸滿反心あり、將軍教興を己が家に養ひて其罪を奪ひ、また中川を欺きて教興の刀を奪はしめて、中川を雪中に凍死せしむ。中川時に歳二十、乃ち幽霊となつて斯波義將及び家治に逢ひ、赤沼の反心及び己が初期の悲惨を告ぐ。赤沼父子反して吉野の城に據りて、中川の幽霊再び現れ、赤沼父子を引立てて義教の前に突出す(雪女五人羽子板)

**なかがは** 中川。新田義貞の部將細六郎左衛門時能美なり。元弘三年卯月下旬義貞鎌倉政の軍評定を開き、中川其席にありて、義貞の弟脇屋義助と和睦せらるべきを述べて義貞を諫む(相模入道千正伝)

**なかに** 能勢判官仲國。美濃國の住人にして、源氏の家士なり。源頼光の來れるを厚遇し、種種の燈籠を飾りて其心を慰む。孟原盆會の日頼光と酒宴の後密に妻を呼び、清原右大将高藤の差出したる封書を見せて其心中を問ふ。妻忠告の後頼光を討ち奉らんとす

ふに同意し、次の間に隠れて其様子を窺ふ。然るに妻は我子の冠者丸を斬つて頼光の身代りたらしめ、尋で自死せんとす。仲國乃ち妻の自刃を制止して頼光を落し奉らす(堀山遊) **なかしひめ** 中蒂姫。阿闍府生諸門の女にして、圓大臣の養女となり、安徳天皇の女御となつて製服せられしも年を経て運氣なし。雄略天皇御祝宴の時、かねて中蒂姫に戀慕せし大草香の臣の魂魄、姫の飲まるる盃の中に入るや、俄に心亂れて雄略天皇を懸懸せらる。よつて勅を下し姫を立上拜殿之介頼國の館に預けらる。阿闍府領諸宗、頼國の館に亂入して姫を奪ふ。諸門の妻、姫の腹を裂きて袋子を出す(浦島年代記)

**ながすね** 筑波長脚。外濱忍熊の重臣なり。忍熊の使者となつて實物を朝廷に奉り、以て景行天皇第二の姫官神寶姫の御降嫁を奏請し、同じ目的にて來朝せる八十鼻師の使者阿蘇磯邊との競馬に負け、鼻言を放つて退去す。後、神寶姫を三草河原にて奪はんとす(日本武尊昔事鑑)

**なかつね** 大炊當世經。父戀右馬尉仲成の逆心を謀めて欺かせられ、山城國西の岡窪原の土民となり又次郎といふ。多治見春國に欺かれて牛を牽き北若倉の深山に入り、大海原王子等の反逆を見て大に怒り、力戦して敵を破り春國を殺して我家に歸る。かくて亡父の仇滿藤を報へども方知れず。よつて父の父濱頼を奪ひ、我子を殺して妻の乳を與へて厚遇しながらも、外面伴つて濱頼を殺したる高札を立て、勝藤の斬入るを待受けて格闘せしが、その心を知つて相和し、共に大海原王子を狙ひ弘法大師等御修法の場に刺

す(嵯峨天皇甘露雨) **ながとし** 名和又太郎長年。出雲國の住人にして忠臣なり。飲食物行商人となり又六と稱して、坊門清忠が後醍醐天皇を幽閉し奉れる番所に来る。折しも小山田高家の妻比丘尼に扮して番人に酒を勧め酔はせて眠らしむ。其間に又六堀を破り天皇の御子遇ひて大和路に天神森に逃ぐる途に楠正行の母に遇ひ、相共に天神森に據つて義旗を擧ぐ、寄來る敵を破り、天皇に供奉して吉野に急ぐ(吉野郡女傳)

**なかなり** 恐石馬尉仲成。猪甘の連の末孫なり。大海原王子の逆心に一味せしも難病に罹りて死し、猪甘の連の魂魄と結んで蘇生し、大海原王子と共に嵯峨天皇を攻めんとすして播磨官勝藤に刺殺さる(嵯峨天皇甘露雨)

**なかのり** 般若五郎仲則。在五中將軍平の家臣にして勢力あり。伴大納言宗岡の家來某國が中宮高子の君を奪はんとすして來れるを振殺し、兼平に陪して河内國高安の里に至り生駒姫の親に身を寄せてしが、姫の伯父大炊之介が惟禰親王に一味して清和天皇を奪ひ去らんとすや、仲則乃ち宗岡に飛付きて首を引取らんとす。後、惟禰親王、清和天皇と御位争ひに負け、宗岡等と共に舉行に及ばんとせられしかば、仲則乃ち宗岡に飛付きて首を引

抜く(丹波業平河内通) **なかはら** 石見守中原。日野中納言資朝の重臣なり。逆心を抱き密に朝敵相模入道に内應し、資朝の跡を絶たんとすして、玄惠法印に資朝の一人阿新九の難裝を頼みしが、資朝の家の子左衛門尉藤原に妨げられて果さず。また茶會に託し資朝を招いて討せんとす